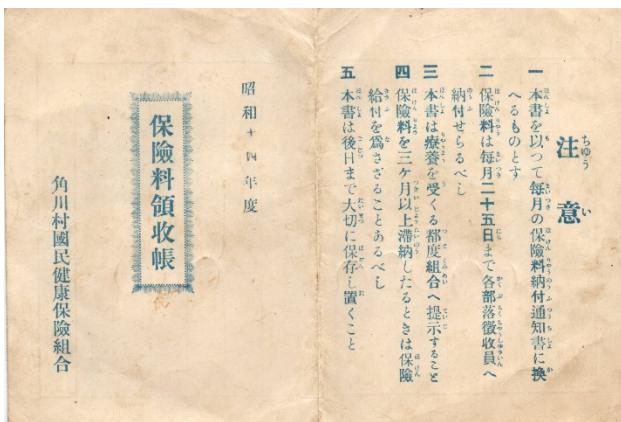
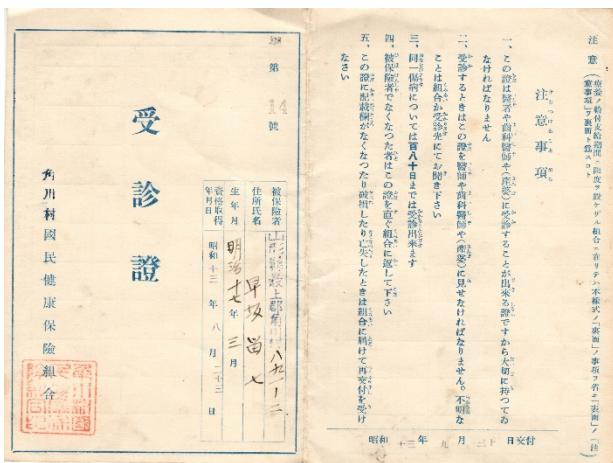


国民健康保険(国保)発祥の地



「国保発祥の地」記念石碑（農村環境改善センター）



角川地区がまだ角川村と呼ばれた昭和の初め、人々は貧しく、しかも村にはお医者さんもおらず、病気になった時は置き薬を飲めば良い方で、薬が手に入らないときは、山菜の根や木炭の粉末などを薬の代わりとして飲んで我慢することもあったそうです。

白米も重病にならないと食べられることもあるほど、村民の生活はとても苦しいものでした。

このため、子どもが病気になり、どうしても医者に診せなければならなくなつたときには、父母は子どもとお金代わりのコメ俵を背負い、古口駅まで歩いて、そこから汽車に乗って新庄のお医者さんに行くことになるのですが、途中で子どもが亡くなるという悲しいこともあったそうです。

こうした苦しく厳しい生活に堪えかねて、角川村から出ていく村民もいました。

この状況をなんとかしたい、と思っていた当時の村長始め村議会議員や地区会長さんなどが取り組んだのが村立診療所の設置と政府が考えていた“国保制度の導入”でした。

村民からすれば、少ない金額で医療を受けられるることはありがたいことでしたが、反面、苦しい生活の中で新たな負担が出てくることには不安もあったことから、村長らは昼夜を問わず熱心に村民に説明しながら理解を得る努力を行った結果、加入対象全世帯からの同意を得て、制度の運営機関の元となる角川村保健組合を1936（昭和11）年に作ることができました。

国保制度が本格的に始まった直後の1938（昭和13）年、角川村保健組合は角川村国民健康保険組合と名前を改めて、組合認可申請を行い、同8月に全国第1号で認可されたことから、国保発祥の地と呼ばれるようになったのです。